学位論文要約

言語学習におけるインプット情報の役割

－日本語を母語および第二言語とする子どもの格助詞学習に着眼して－

広島大学大学院　教育学研究科

文化教育開発専攻　日本語教育学分野

学生番号　D132406

趙　曌

2018 年 7 月

本論文では，日本語を母語とする子どもと第二言語 (以下 L2) とする子どもがどのようにして他動詞文中で目的語を標示する格助詞を学習するのかについて検討した。

子どもの言語学習について検討した先行研究は，インプット情報の量や出現頻度が対象の語の学習に影響を与えていることが報告されている。しかし，主な研究の対象となっているのは内容語であり，格助詞のような，文と文の文法関係を示す機能語については充分に検討されていない。一方，L2 を学習する子どもについては，母語学習では見られないような独自の文法ルールを構築していることが報告されている。しかし，先行研究で見られた言語項目以外についても，独自ルールが生成されているのかどうかについては未検討である。加えて，子どもの L2 としての日本語の格助詞学習について実証的に検討した研究は見当たらない。

本論文では，母語学習及び L2 学習の子どもを対象に，目的語を標示する格助詞の学習におけるインプット情報の影響ついて検討した。具体的には，インプット情報の多い，項が揃った文と，インプット情報の少ない，項が省略された文のどちらの方が格助詞の学習に有効なのかについて調査した。また，母語学習の子どもを対象に，格助詞学習に有効なインプット情報がどれほどの出現率で出現すればその効果を発揮するのかについても調査した。

第 1 章では，文を理解する際に格標識が重要な役割を果たすことと，そのような格標識の学習を説明している仮説として意味的ブートストラッピングの考え方を提示した。また，本研究で対象とする，日本語を L2 とする子どもの抱える言語学習の問題についても触れた。

第 2 章では，先行研究について概観した。まず，格標識の特徴と子どもがそれをどのように学習しているのかについて説明した。次に，言語学習におけるインプット情報の量について検討した先行研究と，インプット情報の出現頻度が言語学習に及ぼす影響について検討した先行研究を考察した。その後，母語学習よりもさらに格助詞学習が困難であると予測される L2 の子どもの格助詞の学習に関する研究も概観した。

第 3 章では，母語学習の実験を行なった。まず，既存の格助詞を用いて母語学習の子どもの格助詞の学習年齢についての実験，及び助詞なし文の理解についての実験 (実験 1)，次に，子どもがどのように格助詞を学習しているのかについて，インプット情報の量の観点から検討した実験を実施した (実験 2)。そして，インプット情報の出現頻度の観点から，実験 1，2 で明らかになった，有効なインプット量を含む文がどれほどの頻度で出現すれば格助詞の学習に有効にはたらくのかについても検討を行なった (実験 3)。その結果，母語学習の子どもは 4 歳以上で主語標示の格助詞を，5 歳以上で目的語標示の格助詞を学習していることが明らかになった。また，助詞なし文の理解において，子どもは最初の名詞を必ずし

も主語として理解しているとは限らなかった (実験 1)。インプット情報の量については，インプット情報が少なく項が省略された文の方が，格助詞の学習に有効であることが分かった (実験 2)。さらに，インプット情報の出現頻度については，有効な情報を含む文が 100%出現せず，80%，さらには 20%の出現頻度であっても，格助詞の学習に有効な役割を果たしていることが明らかになった。

第 4 章では，実験 1 と同様の手法を用い，L2 学習の子どもの既存格助詞の学習について実験的に検討した (実験 4)。実験では，L2 学習の子どもがどのようにして格助詞を学習しているのかについて，実験 2 と同様の手法を用いてインプット情報の量の観点から検討した。その結果，L2 学習の子どもについても，インプット情報の少ない文の方が，格助詞の学習に有効であることが明らかになった。また，L2 学習の子どもは，助詞なし文の最初の名詞を主語として理解する傾向が強かった。

第 5 章では，以下の 4 点について総合考察を行い，第 6 章で本論文の結論を述べた。

1. インプット情報の少ない文が目的語標示の格助詞の学習に有効である。
2. 有効なインプット情報は, インプットに 100%出現しなくてもその有効性を発揮する。
3. L2 学習の子どもは，文の最初の名詞を主語として理解する傾向が強いが，母語学習の子どもはその傾向が強くない。

本論文の結果からは，日本語を母語，及び L2 とする子どもの目的語標示の格助詞の学習において，①インプット情報の多い文はいつも有効とは限らず，学習対象の語の特徴などが有効なインプット情報の量に関係していること，②子どもがインプット中の有効な情報を見極めて利用できることが明らかになった。さらに，③母語学習と L2 学習において，対象の語の学習メカニズムは類似していた一方で，文の理解については異なるストラテジーが用いられていたことが観察された。